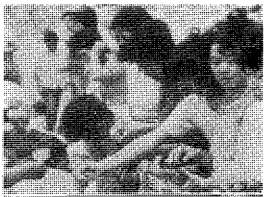
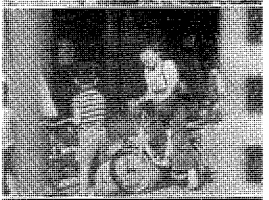
近隣





近所づきあい

柳井千枝子
神奈川区神奈川通　横浜生まれ　主婦　26歳

私は、結婚をして七年目の主婦です。私は、結婚前は金沢文庫に住んでいました。現在は、神奈川区に住んで、本当の浜っ子です。家族は、主人と娘が一人と、私と三人家族です。子どもは主人にそっくりで、私には一つも似ることができません。

我が家はアパートで、八軒の中の一軒。この八軒がくせもので、まわりはアパートだらけ。一人のときは、アパートに一度でいいから住んでみたいと思っていたのに、住んでみると人の口のうるさいこと。子どものことでケンカ腰になり、亭主のことでまたもめて、いわなくて良いこともいわなければならない。私は人づきあいはいい方ですが、それでもまだまだ。人に物をもらえばすぐに返えしたいと思っているので、返えすとすぐに返えすといわれ、知らん顔をしていればまたいわれ、義理がたくすればよいのか。ときどき自分でも、こんな生活がめんどくさくなるが、主婦とはみんなこんなものなのかな？

私が育った所は金沢文庫です。私の実家も近所がくっついていて、私の母は、よく自分の若かりしころの思い出を話してくれます。母の結婚したときは、みんな新婚で、三軒並んでいたそうです。二軒はいつもふ

とんをほすとき、いいふとんしかほさずに、お互いに見えをはりあっていたが、母はそんなことは気にしないで、自分のできるはんいでしたそうです。

私のアパートでも三軒は同じくらいの年で、子どもも同じころ産まれました。三人ということは、なかなかうまくいかず、一人と仲良くすると、一人がにらみ、またもう一人と仲良くすると目を光らせて、なんとむずかしいことだろう。子どもたちを見ていても、三人では仲良く遊ぶことはできない。私は、子どものころ貸家にいて、人の土地に住んでいました。すると、大家の子どもたちが、子どもといってもむかしのことですから五人くらいいて、おれの土地だから遊ぶなといわれ、つらい思いもしました。自分の子どもにはそんな思いはさせたくないと思い、育てていますが、今の所まだ貸家住まい。自分の家に入れるのはいつのことやら。

でも、私の子どものころは、まだ金沢文庫もあんなにひらけていずに、まだまだいなかでした。海もまだきれいで、埋めることなんて、だれが考えていたことでしょう。それが今では、海は埋め立て、マンションになってしまい、あのなつかしい海もあと何年もつことでしょう。田んぼだった所も、今ではスーパー。それも大きなボーリング場ができて、今は文庫も一等地だ。みどりがなくなり、空気が悪くなるのもあたりまえだ。

人の心も、近所より今は自分が中心の時代だ。人のことを考えていても、ごはんは食べさしてくれないし、ろくにとなりどうしでも顔をあわすことがない世の中で、生きて行くには、自分もそんな生活にいつしかなれてしまう。でも、私は、もっと暖かみのある生きかたをしたいと思う。自分の子どもには、そんな人の口のうるさい世の中でも、横浜で育ってほしい。私は横浜が大好きだ。でも横浜が、だんだん知らない土地から人がきて、山が住宅地になってしまって、みどりがなくなるなんて淋しいもんだ。人の心も変わり、環境も変わって、やんなってしまう。近所づきあいも

ほどほどにして、私は自分でいいと思う方向にすすんで行こうと思う。自分がこまっても他人なんて助けてくれはしないだろうし、いざとなると亭主までが他人だし、子どもだけかもしれないが、いつうらぎられるかもしれない。主婦もひまだから、人の悪口をいうことしかできないだろうが、私は自分だけはそんな心のせまい人間にはなりたくないと思う。

一年生市民

保土ケ谷区初音ケ丘　在住一年　主婦　26歳
渡部　典子

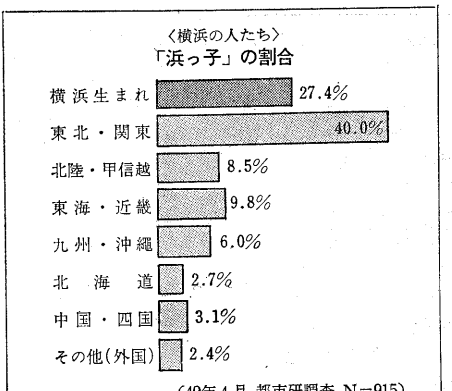
横浜――。この新しい土地に移り住んで、もはや一年にさしかかろうとしている。生まれて二十六年間というもの、田舎の空気を精一杯吸い、そしておおらかに過ごしてきた私にとって、主人の仕事の都合ということだけで、それまでの生活にピリオドを打つことは、決して容易なことではなかったのである。毎朝、新聞の三面記事を大きく飾ることがらの多くは、ほとんど都会に起きている。都会は息苦しい、都会は恐い、そんな恐れだけが私の胸を包んでいた。

そして一年。横浜は、私にどんな印象を与えてくれたであろうか。幸いにも、同郷の人がそばに住んでいたおかげで、いくらか恐怖心は薄れた。だが近所の人々とのつきあいらしいつきあいというのは、ほとんどなかったように思える。たしかに顔見知りになれば、おはようございます、さよなら、よいお天気ですね、そんなあいさつはかわしあう。だがあいさつ程度で、それ以上は進まない。今年で三年目を迎えるという同郷の人も、そんな冷たい世間を嘆いていた。その人は、移り住んで間もないころ、子どもが熱を出して、非常に困ったことがあったそうだ。しかし、病院はどこにあるのかも見当つかず、隣の人に尋ねても「さあ、ちょっと解りませんね」の一言で断わられ、電話帳をめくりめくり、病院探しをしたという。情け深い田舎の人だったら、本当に知らなかったとしても、誰

かに聞いてあげるとか、なんらかの手伝いぐらいはしてくれるであろう。みんながみんな、そんな冷たい人ばかりではないであろうが、あたたかい情けを知るものにとって、こんな生活ほど、味気ないものはないのである。

私の故郷の人は、あまり年のいかない者を除いては、ほとんどの人が家族ぐるみでつきあい、時々お茶飲みといって、茶をすすりながら世間話などをして、ひまな二、三時間を過ごしている。正直なところ、私は大事な時間をお茶飲みにつぶして、なんともったいないことだと蔑視していた。いま思えば、そんなところから、心の交流も生まれてきていたのではなかったか。時折心ない者がいたり、誤解が誤解を生んだりして、争いも生まれないことはないけれど、丸くおさめようと奔走する世話人もかなりいるのだ。

横浜にきてからこのかた、私は日中でも玄関の鍵をしめないことがない。私は当初の恐怖心からそうしていたのだが、あるとき、ふと気がついてまわりを見わたしてみると、どこの家もびっしり錠をおろしているようだ。田舎特有の開放さは、門構えからしてもう全く別のものであったことに気がつく。交流の少なさの原因として、都会では、転出転入があまりにもひんぱんにおこなわれすぎるのではないだろうか。一般の会社をみても、せいぜい二年か三年で転勤命令がおりる



横浜の人のなかで「浜っ子」の割合は，20歳以上の人口の27%。東北・関東地方からの転入者は全体の4割で，うち川崎など県内他都市の生まれが6%，東京都出身は12%。

(注) 都市研調査とは，企画調整局都市科学研究室の全市調査，Nは各調査の対象者数を示す。以下同じ。

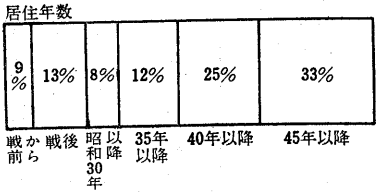
ようである。せっかく、なじみはじめた土地をあとに、またまた新規開拓では、心の交流を望むほうが無理なのかも知れない。会社側にしてみれば、せまい日本、他社に負けじと手をひろげ、足を伸ばし、網を張っている現状なら、人間も当然、最南、最北、しいては海を越えてまで、移動せしめねばならない。話が大きくなってしまったが、それだからこそ、かえって人と人との交流の必要性は、増すのではないだろうか。

幸いにもいま現在、同じアパート内には、私と同年ぐらいの若く張り切った奥様がいて、近ごろは、行ったりきたりの交際が芽ばえはじめた。都会といえども、結局は人が寄り集まった生活なのである。ちょっとした交流で、生活テンポに新しいリズムを加えることができるとしたら、どんな収穫にもまさるものだということを、声を大にしていいたい気持ちのする昨今である。

私の住んでいるところの分譲地は、歴史がまだ浅く、ここ二、三年のうちに急激に戸数が増えたところである。分譲当初から家を構えたと思える年配の人たち数人が寄り集まって、余暇をゴルフとかの練習にあてている様子がみられることを、心から喜こばしいことだと思って見ている。その人達の働きかけか、昨年末に自治会が発足した。自治会役員は、黒一点を除き、婦人ばかりで結束していると聞く。町づくり、都

〈横浜の人たち〉

「土地っ子」の割合



（48・49両年の都市研調査の平均値）

生まれた時から現住居に住んでいる「土地っ子」の割合は，総人口の17.6%。残る8割強は，出生後に転入した人。横浜の場合，他都市にくらべて，転入者の割合が多く，昭和45年以降に転入してきた者だけでも有権者の33%を占める。転入理由には，東京・神奈川からのものに「勤め先や仕事の関係」をあげる人が多く，東京・川崎からの転入者では「手ごろな住宅があった」という人も多い。

市づくりは、住む人々の協力で成りたつものである。住みよい都市にするためには、こんな小さな自治会をどう育てるかにあるだろう。私達家族が、この横浜にどのくらい長く住むようになるのかは、全く見当がつかない。しかし、縁あって住んだ土地である。片言しゃべりの幼い息子が、日に日に横浜という土地に愛着を感じ、第二の故郷にするやも知れぬ土地である。スモッグでやられた灰色の空がいつか青空に変り、冷たいと感じた世間の風も、いつか暖かい風になるように、そしてどこに移り住んでも、横浜はいいところだったと懐かしく思いおこせるような、印象都市に成長してほしいと心から願っている。

町からきた人たち

高橋志津江
戸塚区名瀬町　横浜生まれ　主婦　35歳

私の住んでいるのは、戸塚区の名瀬町です。この名瀬にも、横浜のあちこちで見られる、農村の急激な宅地化という波をもろにかぶっています。しかし、この周辺では、とんぼ、ちょうちょう、せみなどの昆虫や、かなりの種類の小鳥なども、目のあたりに見ることができますので、自然には恵まれていると思います。

姑（しゅうと）や、年長の人たちの話によれば、昔

〈横浜の人たち〉

大都市への入居時期

都市名	総数（%）	生まれから出時	昭和34年以前	35年～39年	40年～45年
東京都区部	100.0	17.5	25.2	12.2	44.9
大阪市	100.0	19.3	28.1	13.6	38.8
横浜市	100.0	17.6	19.3	13.2	49.8
名古屋市	100.0	21.7	25.3	12.8	40.2
京都市	100.0	24.7	27.6	11.0	36.6
神戸市	100.0	17.3	24.3	13.4	44.8
札幌市	100.0	12.0	12.1	14.1	61.8
北九州市	100.0	17.8	21.4	14.0	46.9
川崎市	100.0	17.6	17.9	13.7	50.7
福岡市	100.0	15.8	16.0	13.0	55.0
10市平均	100.0	18.3	23.7	12.8	45.1

（45年国勢調査）

はもっとよかったところといえそうです。たとえば二十年ほど以前には、鎌で刈るほどに野蕗（のふき）のはえていた山があったし、山百合が群生していた山や、しめじや松露などの採れた山が、広大なゴルフ場や住宅地などに姿をかえてしまったことです。開発がすすみ、住宅が増えるにつれて、生活はずいぶんいそがしくなったと思います。

もともと兼業農家の多い村ではあったそうですが、男はもちろん、主婦も、百姓をやっていたのでは金にならんと、野良仕事は勤めが終ってから、というパートづとめの主婦も増えてきています。実際、収支を考えたら、百姓仕事ほど割にあわないものはないと思いながら、自分で作ったものを自分で食べるということを最高のぜいたくと思ってやっています。

町からやってきた人たちは、山や畑や田や野などの自然をほめて、いつまでもこのままにしておきたいですねと、名瀬の村をほめてくれる。しかし私は、近ごろそれを疑いはじめています。我が家の屋敷つづきの土手には、近年までは、草ボケがびっしりと根をはり、四月から五月にかけて朱色の花を咲かせたものでした。ところが、このごろはほんの数片の花しか見られません。採って行く人たちは、自分一人採るのだからと気安く持っていくのですが、大勢の人が採るのですから、大変な数です。気に入ったならば、花の咲くころに見にきてくれればよいのに、淋しくなってしまいます。

子どもたちに人気のあるかぶと虫も、私の家の雑木林もふくめて、たくさんいるようです。とりたい気持ちもわかるのですが、一人で十匹も十五匹もどうするのでしょう。私は、子どもたちに、「飽（あ）きたら山に放してやってね」とたのむのですが、絶えてしまわないうちになんとかしたいのです。

私はここへ嫁いできてから、いろいろなものを観察することができました。せみが地中からはい出て、モクセイの幹に止り、脱皮するまでの長い時間と、カラを脱いだときの新鮮な驚き。黄あげはの幼虫のあざや

かな縞（しま）模様と、必死に脱皮する不思議な生命力……。町からきた子どもたちに見せてやりたいものの一つです。でもその前に、小さい生き物の生活をおびやかさないことを教えなければ、と思います。

私はいろいろ考えたり、書いたりしているうちに、環境に対する考え方で、地づきの人たちと、町からきた人たちとのへだたりを感じました。たとえば、年に一、二回の道ぶしんという行事がありますが、農家の人たちは、当然といった趣きですが、他の人たちは「税金払っているのに……」ということです。農家の人たちは、この村は自分たちの住んでいる村だというだけではなく、自分たちで保ちつづけてきたのだという自信があります。

それはいい面ばかりとはいえないが、私は、自分たちの住んでいる環境は、自分たちで考え、自分たちの手で、実際に手をよごしたり、汗をかいたりして、守り、保っていかなければならないものではないかと思うのです。

禁じられた遊び場

松木一徳
磯子区中原一丁目　横浜生まれ　小学六年生　11歳

ここは、磯子区の中心部です。

このごろは、いろいろと町に工場ができてきたので、遊び場も減ってきた。僕の住んでいる団地の横は、今から三年ほど前はゴルフ場だったが、二種の県営団地が建ったためなくなってしまった。以前、僕たちはそこを遊び場として、夏は虫を採ったり、昔の人が掘った防空ごうを探検したりした。冬はタコを揚げたり、一年中楽しくにぎやかだった。ところがある日突然、ゴルフ場にダンプカーやブルドーザーが入ってきて、土地は見る見るうちに掘り起こされ、青い芝生は土の中に姿を消してしまった。入口の立札には、とてもきれいな団地と公園の絵が描いてあったので、少しは残念だが公園ができるのを楽しみにしていまし

た。それから、しだいに基礎工事が始まり、材料が運ばれてきた。今まで遊んでいた所が、長い間なくなるので、僕たちはがっかりだ。でも、どうにか、僕たちは種々の所に行って遊んでいた。

それから一年後、とうとう待ちに待った団地と公園ができ上った。団地はH型の九階建で、真ん中にエレベーターが付いたりっぱなビルだが、立札にあった絵と異なり、公園は申しわけにほんの少しで、それも団地の片隅にあった。

でも、遊び場のない僕たちには、小さくともうれしい公園だ。ブランコ、滑り台、鉄棒、コンクリートの馬、ジャングルジム、砂場があって、団地の子どもたちは、毎日楽しく遊んでいる。僕たちも遊びに行くと、団地の人たちが作った自治会の人たちが出て来て、「この団地の中に友だちがいるか」と聞くので「いない」というと「それでは、公園で遊んではいけない」というのです。でも友だちがいても「いけない」という人もいます。

僕の住む団地の人が、僕たち、そして小さい子どもたちのために、県に、公園で遊ばしてもらえるように掛けあってくれました。

県では、自由に公園を使うことを承知しているのですが、団地の自治会では、なかなかよい返事をしてくれません。団地ができる前、県は、団地ができて子どもの広場がなくなっても、その代り団地内に、公園を造るから、自由に近所の子どもたちも使えるようにする、との約束だったのです。前はとてもよかったのにと、学校でもいつも話が出ることがある。

僕たちは、このごろ学校で遊ぶようになった。僕たちの町の中で、遊びに行ってはいけない公園があるとは、夢にも思っても見なかった。一つぐらい遊ぶ場所がなくなっても、蚊にさされたぐらいのように思っていたが、一つ一つ広場が減ってきたのには、がっかりだ。

「おとなりさん」

柿崎　正敏
旭区市沢町　在住一〇年　地方公務員　37歳

横浜市に居住するようになって、十年近くとなった。十年ひと昔というが、まるでウソのような気がする。現在の所にささやかなマイホームを手に入れたのはいいが、返金にきゅうきゅうの連続で、それでも隣近所のかたがたとのおつきあいも七年になろうとしている。

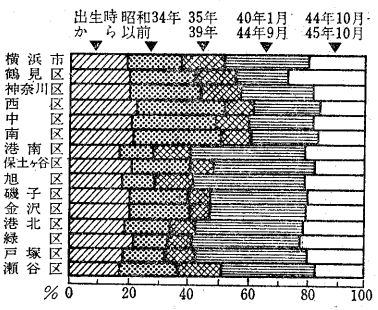
その間、職場でのことは別としても、勤め先と自分の家庭との往復に過ぎず、変りばえのしない連続でしたが、町内会の理事を引き受けたことによって、それらの単純運動は、簡単にも、やぶれてしまった。

町内会の理事とは、名目はりっぱではあるが、現実には輪番制で、その役目がまわってきただけのことに過ぎず、内容的には、町会費、寄付等の集金、広報（市・県）の各戸ごとの配布が主な仕事となっている。

しかし、これでは、そこに生活するものとして、また理事としても、余りにも寂しい気がするし、当番であれ、理事をやらなければいけないのなら、単なる集金屋や小間使いだけではなく、せっかく町内会があるのだから、私たち住民のものとして、もっと積極的にとり組み、参加していいのではないかと思った。だ

〈横浜の人たち〉

新旧住民の割合



（45年国勢調査）

港南・旭・緑・戸塚など人口増加の激しい区では，当然のことながら，昭和40年以降に転入したいわゆる新住市民の割合が多い。

が、やはり今まで通り集金屋で、従来の理事としての域を出なかったようであるし、それとしてしか、扱ってもらえなかったようでもあった。

それはなぜなのか。今、ここで町内会とは何ぞや、と原点にかえって、うんぬんするつもりはない。必要なことかも知れないが、それはさておくとしても、理事自身が、隣組を代表しているという意識はなく、また住民も理事をそう見ていない。また理事と幹事（町会長はじめ役付き）の間にも、まったく同様で、町会費を納入し、広報を早くもらって帰ろうという気持ちが強く、そこには町内の発展のために、話しあおうという空気はなく、意見がでたとしても「そんなこというなら、幹事をやってみたらいい。どんなに大変か……」ということで、なりてがない。意見をのべる方も、答える方も、今のままではいけないんだと承知していて、お互いに苦しみ、悩んでいるだけに、周囲で聞いていても、なんともやるせない感情が流れる。

それならば、町内会そのものも、存在価値がないものならば、なくすればいいと冗談にもいおうものなら、そんな馬鹿な？と笑われる。

どちらにしろ、真剣に考えなければいけない問題ではあるが、いつも中途で終ってしまう。なぜさけようとしているのか。都市化だけの弊害だけだろうか、と悩み苦しんでいたとき、「地の人」と「よそ者」という目に見えない感覚が、その原因の一つになっているのではないだろうかと、ハッとした。その言葉が、お互いの行動をけん制させ、事なかれ主義にさせていたのではないだろうか。もし、そうだとしたら、これはどうにもならないことなのだろうか。

そこに住むようになった理由はどうあれ、地の人であれ、最近転居してきた人にしろ、現在そこに住んでいるということは事実である。それならば、何とか、それらの目に見えない区別をとり去るものはないか。お互いに意識したり、身がまえたりせずに、町内そのものの成長に、努力はできないものだろうか。そんなことから、私は理事として、何か共通点を見出すこと

はできないか。まず、私の隣組からと、迷ったあげく「新聞」を発行することにし、それに「おとなりさん」と名前をつけてみた。むろん、ただ一人での編集・発行なので、技術的にも内容的にも幼稚さはいうまでもないが、徹夜で完成したときのホッとした気持ちは、今でも思い出す。

その結果はどうだったのか。私自身で結論を出す前に、一年間の任期はきてしまったが、湖水に石を投じたときに、波紋が生じるように、何らかの影響を与えはしなかったろうか……と楽しみにしている。

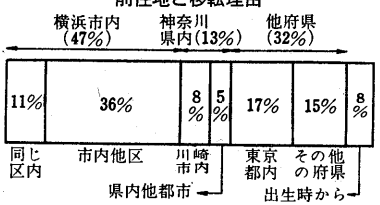
団地浸水

鎌田　春子
戸塚区上倉田町　在住三年　主婦　25歳

郷里、福島を後にして、川崎、東京、そしてまた川崎と、私は引っ越し貧乏になるほど、住居を変え、やっと落ちついたのが、ここ横浜市である。といっても持ち家ではなく、狭い一DKの団地住い。いずれまた、引っ越すことになるでしょうが、それでも、ここに住んでからあと数カ月で三年になろうとしている。ここに住むと同時に結婚、そして一年半後には出産、と私としてはかなりの大役を果たしたつもりでいる。

〈横浜の人たち〉

前住地と移転理由



（48年2月都市研調査　N＝1,101）

横浜市では昭和30年以降，東京・川崎などからの転入者が増え始め，35年からは市・区内移動も激しくなった。40～45年の人口移動の内訳は，市・区内移動が47%，他都市からの転入が53%。前住地を引き払った理由では，30年以降の居住者に「就職や転勤のため」が多く，35年以降で「住宅に不満があったから」が増え，45年以降では「公害などまわりの環境がよくなかった」をあげる人も多い。

まだ一歳を迎えたばかりの息子を相手に毎日、一DKの狭い部屋で、てんやわんやの私にとって、周囲に目を向けるほどの余裕はない、というのが本音のところです。しかし、一つだけはっきりしている、というより体験によって私は、この上ないみじめな思いをしているのです。ご存じのかたがたもおいでのことと思いますが、昨年（昭和四十八年）十一月のあの豪雨により、私たち、団地一階の居住者は、床上七〇センチメートルという浸水を受け、自分の家に、土足のままで上がらなければならないつらさを体験したのです。避難のときは、まだ誕生日を一度も迎えていない幼子を片手に、必死の思いで上の階へ逃げ、オムツやミルクの心配をしながらも、断水になり、どうしようもないまま時はすぎてしまいました。

大人なら我慢もできますが、しかし赤ん坊にはそれができません。どうか泣いてご迷惑のかかることがないように、と祈るような気持ちで、上の階の方にお世話になり、一夜を明かしました。でも、ドロドロで何か異様な臭いのたちこめる、その上、身体のシンまで冷えてしまうような、ぬれきった部屋の片隅の押し入れの中で、主人は一夜を明かしたのです。カーテンもフスマもない、夜空が一目にして展望できる押し入れの中で。そんな主人が可哀いそうで、私は涙を流すまいと、こらえたことを覚えています。

豪雨の翌朝は、まるで昨日のそれが夢であったのでは、と錯覚してしまうほどの晴天。ドロドロになった我が家に、雨靴（くつ）のまま上がり、ひき出しがどこかへ流れてしまった本箱、タンス、冷蔵庫、洗濯機……すべて汚れてしまった家具や電化製品、片づけきれなかった細々した物、そういう物の後始末は、口ではいい表しようのない複雑な気持ちでの重労働でした。何の補償もない、心の重い作業を幾日も続け、やっと落ちついたのは、二十日くらいたってからだったと思います。

どうしてこのように多量の水が団地に押し寄せてきたのか……。それには、いくつもの原因があったよう

です。国鉄の、市の、そして柏尾川の……。我々は水害被害者同盟を結成し、公団側と幾度も折衝を重ね、今やっと一階は住居不可能、と市よりの申し渡しを実行されようとしている。しかし実際には、いつになったら、この一階から移れるのか見当がつかない。また梅雨期を目前にし、雨が降るたび毎におびえ、心配しながら過ごさなければならないのかと思うと、暗い気持ちにならざるを得ない。あの豪雨以来、再び浸水を起こさないよう対策を急ぎ、工事をおこなってはいるが、梅雨期までに工事が終了するのかどうか……。

この団地は、駅からは比較的近く、また公害にも侵されておらず、水害の心配がなければ、良い所なのですが。三年近く住んでいると、いろいろ付近の地理にも詳しくなり、できるならば長く住んでいたい、という心境です。しかし、引っ越してきた当時はまだ、車の量も少なく、静かな所だと喜んでいたのですが、最近では、車の急ブレーキ、救急車や火災のけたたましいサイレンに、眠りからさまされることがたびたびです。それに日中は、周辺での工事の音に頭が痛い毎日。何とか、もう少し静かな雑音の少ない日々を送れたら、と願っている私です。それに団地に住んでいる者にとっては、仕方のないことなのかも知れませんが、古新聞交換が一日に三回ぐらい、クリーニング屋さん、その他数多くの業者が、スピーカーを鳴らしな

〈横浜の人たち〉

横浜を選んだ理由

①東京に近く暮らしやすいと思った…… 3%
②通勤・通学や仕事の都合で……30%
③親・兄弟がいたり，知人の関係で……13%
④結婚して家庭をもった……15%
⑤住宅がみつかったから……23%
⑥横浜のイメージが好きで…… 2%
⑦その他いろいろの都合で…… 5%
⑧生まれてからずっと住んでいる…… 9%
（49年4月 都市研調査 N＝915）

選択理由は②⑤④の順に多い。昨今のすさまじい住宅難のもとでは，①⑥のような理由で居住地を選ぶことは，まず考えられないということを示している。

から毎日毎日、子どもが眠っているときなどは、ハラハラしながら、早く音が遠ざかってくれないかと思う私です。この子が小学校へ入学するころは、多分、また別の所で暮らしている私たちでしょう。そこそこは、もう少し騒音の少ない、もう少しのびのび生活できる所であって欲しいと念願して止まない私です。

総論は賛成でも……

古内　菊江
港北区樽町　在住一〇年　主婦　30歳

ただ今、娘は昼寝中。娘が昼寝をしていると、何かしらあせってしまう近ごろである。

先日、結婚四周年を迎えた。思えば四年前の秋、婚約中の彼が、横浜に小さな家を買ったので見てほしいという。それがこの港北区とのおつきあいの始まりである。「銀行に、自分にとって大きな借金があるが、何とか二人してがんばろう」といったときには、細身の彼がとてもたくましく感じられた。その後、私が訪ねるたびに大工さん等が作業中で、古い家が見違えるようになってゆく。翌春には新築同様で、私たちは胸が熱くいっぱいになったのを思い出します。

この四年の間、我々は結婚し、妊娠八カ月で火事にあい、増築し、子どもを産み育ててきたが、この樽町地区も大いに発展した。近所のお話では、ひどく道が悪く、長靴でもドロにうまる所があって、通勤、通学にもとても困ったが、こんなに良くなってきたのは、つい最近とのこと。バスを降りて、ドロ道を訪ねた婚約中を思い出すが、今ではすっかり舗装され、これが当り前と思うのだから、人間の慣れはおもしろい。その上、中学校が来年、開校する。

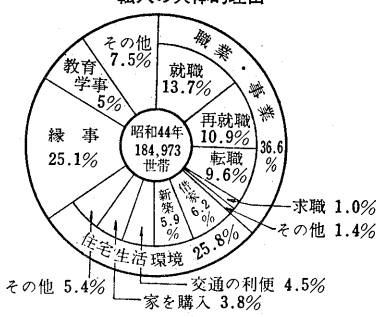
我が家の裏に下水のマンホールがあるが、どなたかの庭を通らなければお掃除ができないので、これが近所の悩みの種。最短距離が最善と思う私は、裏のわずかだが、人が通れるだけの土地を提供しましょうと話しあいに応じたが、そこへは二軒のお宅を通過しなけ

ればならない。美濃部都知事の言葉を借りると、総論賛成、各論反対でいまだ解決せず。民主的で良いけれども、せっかちな私には何ともはがゆいけれど、そこはそれ、各家庭の事情もあるのでがまんしている次第である。

横浜というと港町のイメージが強いので、知人等が我が家に着くと「ここも横浜かね」なんて申します。バスを降りて、畑を通って、小さな山の下なものですから。それでも、私なりに満足してます。子どもを遊ばせたり散歩に快適なあぜ道が近くに残っておりますし、実家の東京より静かで空気が良いからです。我が家は小さいけれど、広い農地があるだけで清々しますし、なにより食糧危機が叫ばれている昨今、ぜひとも農地は必要です。一度宅地にしたら、戻すことは不可能に近いのではないかしら……。物価上昇はすさまじいのですが、家族の一人一人が身心ともに健康であったら平和に過ごせるのと同じで、この横浜市も他市に先がけて長い目でみた善政を施行すれば、日本はもっと住み良い国になるのではないでしょうか……。環境を破壊しないでの発展はむずかしいと思いますが、今後とも私なりの目でこの横浜を見つめていきたいと存じます。今、ニュースで、アジア卓球大会について報じております。今日までのところでは、北朝鮮が参加しないとのこと、とても残念です。卓球には縁のない

〈横浜の人たち〉

転入の具体的理由



（総務局「昭和44年横浜市移動人口実態調査」）

昭和44年の転入理由では職業・事業がもっとも多い。転入者の1世帯あたり平均人員は1.6人と低い。単身世帯が71.5%，20代の人が44.3%もあり，若い世代の転入が目立つ。

生活ですけれど、この横浜で国際大会が開かれるだけでなにか誇りを感じます。そして、大会の中の一試合でも観戦したい気持ちなのです。日ごろ、子どもの寝顔を見て幸せを感じているのに、こんなときはうらめしく思い、母親ってつまらない！なんて勝手にそばで寝ている子どもの赤いホオをはじく。あと一カ月余りで二歳になるこの子が大きくなったら、一緒にサイクリングにも山登りにもと、思いは果てしない。そしてそんなころでも、緑多い神奈川であったらな、とつくづく思っている間に、娘は目に手をやり、起きる気配。私一人の時間もこれで終り、これからはいたずらっ子との戦いが始まる。

それから十年

柳原　良平
中区山手町　在住一〇年　漫画家　43歳

横浜に住むようになって、ちょうど十年になる。八年間住んでいた東京から引っ越したのは、東京の家を売りはらって、少し広い家に住もうと思ったからだが、船や海の好きな私にとって、横浜は単に東京から離れた隣の町ではなくて、むしろすすんで住みたかった町といえる。住んでいた東京の家は、サントリーの社宅を安く買いとった十坪ちょっとの、いわゆる文化住宅といわれる高級長屋のひとつで、その家を売っていくらか足せば、少しは広い家に住めるのではないか、それも東京から離れて横浜なら望みもかなうだろうと考えたわけである。

土地探しは、横浜の不動産屋にたのんだが、その条件のひとつに、船の見える所ということを入れた。何回か不動産屋に連れられて見に行ったが、マストらしいものが一本かすかに見える場所だったり、港が見えるが火葬場のうらだったりで、なかなか予算に合った希望の土地はなかった。今の山手の土地にきめた時は、予定していた予算をはるかに越していたし、二段に分れたがけ地で、建築はめんどうな所だったが、た

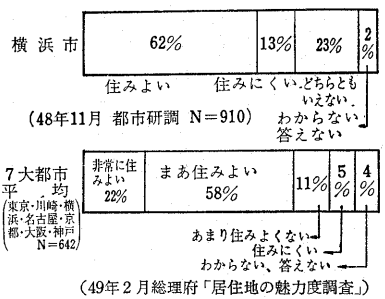
だ、そこから眺められる港の風景が、ソロバンに合わないからとあきらめさせる気持ちを失わせてしまった。草ぼうぼうの造成地に立って港を見ていると、一万トンクラスの貨物船がしずしずと入って来るのだから、もう前後の見さかいもなく決めてしまったのである。

引っ越して来たその日、根岸線が開通して、石川町から坂を上って五分という私の家は、あっというまに便利な場所に位置することになる。まだその頃は、石川町の駅近くもこれといった店もなく、ハシケ労働者のためのめし屋や立ち飲みの酒屋といった店がぽつんぽつんとある程度だったと記憶する。元町商店街も、もちろん今とくらべものにならない静かさで、人通りの少ない日中、歩いていると本当に外国の町角にいるような気になるたたずまいだった。

一年たって、わが家の環境はガラリと変わる。山手は風致地区だというので安心していたのに、突然隣に四階建ての連れこみホテルが建ったのである。違反じゃないかと市役所へ文句をいったが、私一人の抗議ではとり合ってくれない。周囲は空地なのだから、迷惑を受けるのはとりあえずわが家だけなのである。民主主義とは、ことの善悪に関係なく人数をあつめない限り要求が通らないものらしく、近頃は地域エゴでも通ってしまう、全く不合理な政治形態である。そんなわ

〈横浜の人たち〉

居住感



現住地を「住みよい」と感じている人は，比較的居住年数が長く，持家や公営団地の居住者に多い。逆に「住みにくい」という人は，民間アパートや間借りなどの借家層に多く，地域別では，鶴見・神奈川・西・中・磯子などの臨海部の区ほど高くなっている。

けで、孟子のお母さんなら翌日引っ越したことだろうが、貯金通帳をはたき、借金をして建てた家では、そう簡単に動くわけにいかない。泣き寝入りで、毎夜、男女のうめき声をききながら風致地区に暮らすことになった。

さて、北・東に面している私の仕事場からは、右にマリンタワー、左にシルクホテルを眺め、大桟橋・山下公園と港の中心がほとんど視界に入っていた。途中、明治屋のビルが少し海を分断しているが、出入りの船に焦点を合わせ五〇〇ミリの望遠レンズで写真をとると貴重な資料となる。しかし、それも年を追ってビルが建ち、今では当時の五分の一ぐらいの視界になってしまっただろうか。一万トンの客船が入って来ると、船首の見えている時は船尾がビルの陰になり、船尾があらわれると、船首はすでに次のビルのむこうというわけで、オカシラつきの船を見るのはむずかしくなった。

子供の絵本に「小さな家」というのがある。花咲く野原に建っていた一軒の小さな家が、周囲の発展につれて、ビルの谷間の家になり、ついにとりこわされて、また、よその野原に移るという話だが、私たちの住んでいる町も何やら似ているような気がする。

まあぜいたくはいえない。十年間港が眺められたことだし、日照権はともかく、眺望権なんてムシのよすぎることだから、これからは船が見たくなれば港まで行けばいいと思っている。それに港も十年前とくらべると、本牧埠頭に主な機能が移り、大桟橋へくる客船も定期船が大半消えて、春だけ集中的に訪れるクルーズ船ばかり、それも今までよりひとまわり小粒になった。

時がたてばなんでもよくなってくると思えたのは、十年前ぐらいが限度のような気がしてきた。住みよいとはなんだろう?人口の多い都市が、必ずしも住みよい町とはいえなくなった。町の規模が大きくなって、そこの市長さんや役所は大きな顔ができても、住んでいる市民にとっては少しも有難くない。数の多さが発

展・進歩と思っていた時代は終った。新幹線、SST、高層ビル、どれも企業としての進歩の陰に、人間性を無視した公害を残している。二五〇万人にふくれあがる横浜を象徴する林立する高層団地、あの画一的な環境が個性のない、他人への思いやりに欠け、自己中心的な日本人を量産しているとしたら、果してここ十年の横浜市の発展を喜んでいいものだろうか。

月面と裏山

助川　信彦
金沢区釜利谷町　在住二五年　地方公務員　56歳

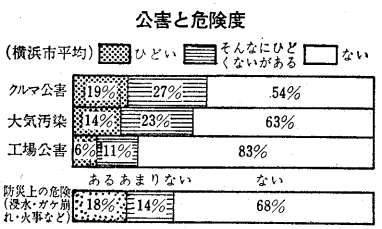
ちかごろ、人類の終末が近づいているという議論がさかんである。中央のあるお役所が、大都市の子どもたちを相手に調べたところによれば、現在の子どもが成人するころに人類の危機が到来するであろうという意見が多数を占めたという。

人亡びしのちも信号青くともりけものの乗りし車往き来す

人在らぬ高層ビルあまた残るうえに星よりも光弱き日が照る

〈横浜の人たち〉

公害と危険度



(48年2月　都市研調査　N＝1,101)

4項目に限定した有権者の評価では，クルマ公害が全市共通の悩みで，各地域とも4～6割の人が訴えている。つぎが大気汚染で，公害病指定地域をかかえる臨海部の区では，その状況をひどいと感じる人が3割に達し，内陸部へ入るにつれて良くなるという地域差が強く認められる。その他の項目でも，臨海部の環境の悪さがひどく，市域周辺部の環境が比較的めぐまれていることがわかる。

このような幻想におびえる人もいるようである。せっかく、生れてきた赤ちゃんを捨てるような母親も、ときどき現れるようになったが、一般には、親というものは、自分自身は苦労をしても、子どもだけはすくすく育って、限りなく伸びて欲しいと願うのが常だ。

ところが、現在の子どもたちは、自分らの未来は暗い——と感じているというのである。なぜ、そうなのか。マスコミやS・Fのせいとばかりもいえないようだ。反省してみると、私自身、具体的な経験や日常的な感性をおろそかにして底の浅い知識やよせあつめの情報をたよりにして暮している傾向がある。また、仕事や職場のことにとらわれて、妻子のことや生活の本拠である地域のことには、とかく関心がうすい。それらの要素が子どもたちに投影して、あすへの希望を奪っているのかも知れない。

何年か以前のこと——それはちょうど人間を乗せた宇宙船が月に着陸して、人類のひとりが、はじめて月に第一歩を印したありさまを、テレビによって、目のあたりに見て感動したころのことであった。ひさしぶりに早く目を醒まし、裏山を散歩してみたくなり、朝の散歩に出た。

いつのまにか、わが家の裏山には、団地造成工事がはじめられていて、谷がならされ岸が削られ、おびただしい土が、掘りかえされたままになっていた。

その日の午後から豪雨がおそってきて、夜半には土砂崩れが起り、崖下の家は埋まり、やや離れたところにあるわが家の庭にも土砂が流れこんだ。翌朝は、慣れぬ手にシャベルをもって、土砂の排出作業に従事した。役所の指示もあって、造成業者がブルドーザーやシャベル・カーを動員して、土砂の排除に努めたので、わりあいに早く復旧し、その翌日には、排水路の水も流れるようになり、道路も歩行が可能となったが、一時はどうなることかと思ったのであった。

お月さまに、はじめて人が降り立ったありさまは、テレビが映してくれるから、はるかに遠方の出来ごとでも、手にとるように分る。わが家の裏山の造成工事

のことは、近所のことだが、無関心でいるとすこしも分らない。たまたま、私は土砂崩れの起る日の朝、裏山に散歩に出て、「危ないな」と感じたのであったが、まさかその日のうちに変事が起るとは、思わなかったのである。

身辺

病院で

渡部道子
西区久保町　在住二年　主婦　30歳

近くの小児科の先生に頂いた紹介状を持って市大病院に行ったのは、小雨の降る肌寒い日でした。「おなかが痛い」と二女が時々いうようになったのは、水痘にかかり、それが治り始めたころからでした。「おへ